

学校心理士会神奈川支部ニュースレター

第9号



2011年5月20日発行
発行責任者 岡田守弘
芳川玲子

〒259-1292

平塚市北金目 4-1-1

日本学校心理士会神奈川支部ニュースレター第9号をお届けします。

昨年度は、8月に神奈川県において全国大会が開催され、支部会員の皆様には多大なご協力を頂き、盛会のうちに終わらせることができました。全国大会のために例年6月に行われている神奈川支部総会も書面にて行い、年3回の支部研修会も2回とするなど、変則的に行うこととなりました。今年度は、例年のように総会、研修会を行っていく予定です。また、各地区支部会の活発な取り組みも期待いたします。

2011年度の主な予定

●2011年度神奈川支部総会・研修会

日時 6月19日(日) 14:00~14:30 (受付 13:30~)

場所 かながわ労働プラザ(エルプラザ) 多目的ホール [JR石川町近く]

第27回研修会 14:30~16:30

「子どものこころが不安に覆われた時—学校がこころの支えになるには—」

講師 玉井 邦夫 先生 (大正大学教授)

●第28回研修会

日時 10月16日(日) 14:00~16:00

場所 ウィリング横浜

「台湾訪問研修報告と最近のアジア特別支援教育の動向並びに学校心理学活用の展望」 仮題

講師 芳川 玲子 先生 (東海大学教授)

●第29回研修会

日時 平成24年2月26日(日)

場所、講師、内容共に未定



第25回研修会報告

日時 2010年11月21日

場所 ウィリング横浜

「協力的集団体験を通して中学生の自己評価を高める教師の援助的介入」 —文化祭での学校劇活動に焦点をあてて—

講師 帝京科学大学 樽木 靖夫 先生

【研修の概要】

中学生を対象とした場合、肯定的な評価でさえも教師からのフィードバックに効果がみられないことが報告されている。中学生は仲間関係を重視し、自律的である発達の特徴をもつため、仲間からの評価を教師がフィードバックする方法を検討する必要がある。仲間からの肯定的な評価を教師がフィードバックすると、生徒は自信や自己評価を高める効果が明らかとなった。中学生が仲間関係を重視していることに改めて注目する必要がある。

このような生徒の評価が相互にフィードバックされる場として、講師の中学校教員としての経験に基づき、学校行事が有用であると考え、文化祭での学級劇活動における効果を検討した。評価尺度として

- ① 主体的に活動するか、協力的に活動するか、運営に気遣えるかなどの自己の活動
- ② 一緒に活動する他者と理解し合えるか
- ③ 活動する学級集団を肯定的に捉えられるか

についての3つの尺度を試作し、文化祭での学級劇活動の前後に測定すると、いずれの自己評価においても得点を高めた。

さらに、文化祭での学級劇活動を協力という観点より捉え直すと、①出演者、大道具、衣装など係で活動する「係集団での協力」と、②それら係の活動をあわせて、学級全体で協力して一つの学級劇を作り上げる「学級での分業的協力」という2つの協力が考えられる。講師自身の担任教師としての学級指導の実践事例や他の担任教師への聞き取りにより、2つの協力を促進するための教師の援助的介入を検討した。その結果、①「係集団での協力」では、係で協力ができない場合、教師による「話し合いの提案」の介入が有効であること、②「学級での分業的協力」では、「学級での協力を意識させる介入」「生徒自身が考え活動することを促進する介入」が有効であることを示した。いずれの介入も、中学生が仲間関係を重視し、自律的である特徴に応じたものであった。また、このような教師の援助的介入が「係集団での協力」や「学級での分業的協力」を促進して、生徒の自己評価に影響することをパス解析により示した。

最後に、学校行事を対象とした教師の介入として、

- ① 機会の計画的設定
- ② 予防的援助（活動内容を伝える。計画を立てさせる。学級の協力を意識させる。）
- ③ 促進的援助（話し合いの提案。関わり方や方法のモデルを示す。見守る。）
- ④ 集団としてのふりかえり・意味づけの援助

の4つの援助的介入が必要であることを提案した。

樽木先生の研修は、教師として学校心理士が行える研究のあり方を示された。また、教育実践をこのように分析的に研究し、生徒を成長させる教育のエッセンスを明確にすることが、教育の質を高めることに有益であることも示唆された。

第26回研修会報告

日時 2011年2月27日
場所 平塚市中央公民館

「非行臨床の理論と実際」

講師 立正大学 村尾 泰弘 先生

【研修の概要】

少年非行は凶悪化しているようにいわれるが、決して凶悪事件が多いとはいえない。現代非行の特徴は、むしろ、補導歴や犯罪歴のない人がいきなり凶悪な事件を起こす「いきなり型」に特徴がある。凶悪事件の舞台裏をみると、それらの事件を起こす非行少年には、その犯行にコミュニケーションが介在しない特徴がある。

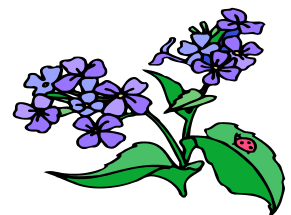
何度、捕まっても犯罪を繰り返す犯罪少年は、罪悪感が深まらないのだろうか。この課題について、2つの事例より、その共通点として、加害者でありながら被害意識が強い特徴を見いだした。この被害意識を手当しないと、加害意識は深まらない。非行少年は傷つく体験が多く、神経症者と同じように「自分はダメな人間だ」といった厳しい超自我をもつ。神経症者はこの苦しみが自分に向かい、非行少年は周囲に向かうといえる。非行少年も苦しみを抱えていることを忘れてはいけない。

では、非行少年とどのように関わったらよいか。それには、行動規制の必要と自由意志を尊重するカウンセリング的な対応という、相反する2つの役割を取る必要がある。コツは、自己決定の原則である。非行少年は上手くいかない時、他人の判断を言い訳にするので、自己決定させないと罪悪感が育たない。

後半は家族へのアプローチの重要性について講演された。非行事例に関わった経験より、問題行動は家族の問題を表現していると考えている。家族療法では、親が悪いから子どもが非行になるとは考えない。親子関係によくない循環があり、家族システムを変えることによって、子どもの問題を改善できると考える。

それは、次のような家族の事例で紹介された。子離れのために家族システムを変える時期に、母親が頼るべき父親を家庭から排除し、母親は子どもに過干渉となる。母親の過干渉を嫌った子どもは非行に向かうという悪循環に陥った家族であった。この事例では、母親がしようとしている過干渉を止めることが悪循環の切断になると指摘された。

悪循環の切断には、「人を変える」「場所を変える」「時間を変える」「ポジティブ・リフレーミング（肯定的に視点を変えて考える）」といった方法が有益であり、カウンセラーは家族の中に入ってシステムを変えようとする。このような視点に立つと、家族支援の基本は、まず、非行少年と家族との間に良好な人間関係を築くことと気づく。そのため、好ましい行動が出現したら、それを褒める。どのように褒めたか、どのような変化が起こったかを検討することが支援の手がかりとなる。そして、好ましくない行動を止めるには、警察や裁判所も利用できる。家庭裁判所からの呼び出しに対して、どう対応したらよいかを家族で話し合える関係をつくることが重要である。結論として、「周囲が困る子」を「本人が困っている」と捉えるような認識変換の重要性を指摘して、本研修のまとめとされた。



地区会報告

—横須賀・湘南地区会—

8年間、地区会の事務局を微力ですがやらせていただきましたが、このたび地区会事務局を新たな方に引き継ぎました。地区会の研修会も、これまで年間5回開催してきましたが、2011年度は年間3回の開催となります。

第1回は6月11日（土）13：00～鎌倉市福祉センターで昭和女子大学の三浦香苗先生を講師に「児童に対するしつけの時代差」というテーマでお話頂きます。詳細につきましては地区会事務局より5月頃に横須賀・湘南地区の会員に案内が出されると思います。

横須賀・湘南地区の会員の皆様、今後とも地区研修会（情報交換会）への参加、よろしくお願ひします。
（北村耕一）

本の紹介



「非行と広汎性発達障害」 藤川 洋子 著 日本評論社 1785円

著者は数々の少年犯罪と向き合ってきた元・家庭裁判所調査官。わが国でいち早く、犯罪と発達障害の関係性に着目し、更生への新しい視点を提言してきた。突発的で不可解な少年事件が「犯罪の低年齢化、凶悪化」と不安視され、情や痛みを交えず罪を重ねる「奇妙な少年」と見られていた子どもたちに対して、冷静に真摯に向き合ってきた軌跡が読み取れる。「反省が見られない」と遺族の怒りを買う少年にも、更生への手立てがあることを丁寧に説明している。

「特別支援教育のプロとして子ども虐待を学ぶ」 玉井 邦夫 著 学研 1700円

子ども虐待は増加の一途をたどっている。一方的な加害者であると思われるがちな親も、多くの問題を抱えながら孤立していることが多い。毎日子どもに接する教師は、虐待の発見者になる可能性が高く、学校は虐待防止におけるヒューマンサービスとして期待されている。しかし、具体的にどうすればよいのだろうか。本書では、子ども虐待に横たわる問題をわかりやすく解説し、子どもと親を支援するための具体策を提案している。

お知らせ

この3月の大震災に関して、日本学校心理士会ホームページには「東日本大震災支援ページ」が開かれています。神奈川支部ホームページからも以下の情報にアクセスできます。

【NASP (National Association of School Psychologists) 資料】

被災地の子どものみなさんへ	すべての子どものみなさんへ
被災地の保護者のみなさまへ	すべての保護者のみなさまへ
学校管理職のみなさまへ	

【編集後】 季節はいつもと変わらずに巡り来て、寒さにかじかんでいた山も薄黄緑色から、いつの間にか力強い緑色に変わってきていました。3月11日の大震災の時、神奈川支部の皆様もこれまで経験したことのない大地の揺れを感じたことと思います。その時を境に世界は変わり、それは現在も進行中です。不安、不確実、不足…多くの「不」が横たわる中でも一人ひとりがそれぞれの場でどうしていけば良いのか、考え行動していきたい思いです。このニューズレターが会員皆様の集いの場としてお役に立てることを願ひます。

E-mail : ryoshi@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp (編集部)